

⑤ 「被災者ネットワーク」

(代表・安田 秋成)

被災者の高齢化に警鐘を鳴らし続ける活動

(震災を風化させない取り組み・紹介)

10周年 手づくり 法要

時・二〇〇五年一月十七日(月)
第1部 午前10時
第2部 午後一時半
場所・兵庫県私学会館
(JR元町駅北西徒歩3分)

阪神・淡路大震災被災者ネットワークは、九月に入って、来年一月十七日の、手づくり市民追悼式の取り組みを始めています。来年は、震災十年の節目、被災者が新たに生き直す力が生まれるよう企画を練っています。一部の音楽法要は、甲府市を中心に各地からボランティア僧侶が十五名、川村旭芳さんの琵琶の演奏もあり、魂をゆすぶる法要です。二部の交流会にも力を入れています。被災者、市民交流会として、ゲストに高遠菜穂子さんを迎える予定です。イラクで拉致され、死の恐怖にさらされたながら、釈放された時の第一声は、「それでもイラク人を嫌いにはなれない。」でした。

この死線を超えて愛に生きる女性のやさしさ、たくましさは、身近な者を亡くした嘆きと悲しみ、辛い傷跡を持つ遺族の方、そして被災者の心を満たしてくれるのではないのでしょうか？

震災十年、被災者の心の傷を癒す取り組みを準備中です。たくさんの方々の参加を呼びかけます。

震災十年にふさわしい
「手づくり法要」準備中

被災者ネットワーク
代表 安田 秋成

⑥ 「救援復興兵庫県民会議」

(代表委員・合志至誠氏他)

「被災者、最後の一人まで」その支援を続ける活動

(震災を風化させない取り組み・紹介)

被災地の労働組合・諸団体40団体余りと専門家、研究者が参加

救援復興兵庫県民会議は、被災地の住民自らが立ち上がり、ともに手を取り救援活動と住民の生活再建運動を進めることを目的として、95年3月4日に被災地の労働組合や諸団体40団体余と医師・弁護士・建築家・学者などの専門家、研究者も参加して結成されました。爾来、今日まで、救援、住民の願いを行政に反映する運動、とりわけ被災者個人の自助努力ではないかんとしがい住宅・生活再建への公的助成の拡充を求めるさまざまな運動や住民が主人公となる新たな街づくりにとり組み、成果を上げてきました。

2001年には、国連社会権規約委員会に代表派遣して、被災者の声を届けるなど、被災者の人権問題として、個人補償を捉え、全面的な公的保障実現に向けて運動をさらにすすめています。

連絡先：〒650 神戸市中央区中町通3-1-16 サンビル301号
Phone: 078-371-4560 Fax: 078-371-4559



⑦ 「神戸・子どもと教育ネットワーク」(Kネット)設立 子ども達の安全と安心のネットワーク

(代表・池見 宏子)

(震災を風化させない取り組み・紹介)

「子ども達よ健やかに育て」設立総会8月29日の模様が、毎日新聞に報道されました。第1部・大型紙芝居、第2部・渡部吉泰弁護士による講演「子ども達の危機をどう考えるか?」第3部・設立総会では、[Kネット]の三つの精神①みんなが集まる②情報発信のセンター③資料・人材などの創出の場を確認。これから《できるだけ多くの人に「自分のもの」と受け止め活用してもらう》ことが課題です。「Kネット」が神戸の教育・子ども達に関するネットワークとして、生き生きと機能する為、皆さんの参加を呼びかけます。

連絡先：神戸・子どもと教育ネットワーク事務局：神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル502号
TEL/FAX078-391-1245 事務局：中塚和代 (TEL・FAX 078-958-0704)

被災地だより

絆



これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ
第24号 2004・10・7



全神戸市教職員組合「絆編集係」神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル3F・
TEL-078-391-7508・FAX-078-391-8549・〒振込口座番号01170-7-29732

震災10年目を目前にして・・・

問い直し語り継ごう

震災の教訓を!!

生かされた命を活かすために!!



地域で育った様々な取り組みが
教育現場に生かされることを願って!!

この10年近くの間、被災地では、震災の教訓を風化させない様々な取り組みが行われてきました。ボランティア、NGO、NPOなど、市民による自主的な組織が生まれ、その間、行政が手の届かない様々な施策の穴を埋めるように活動し、被災者を励まし、その運動を進めてきました。

しかし、残念ながら、運動の成果が《学校現場》に反映できるところまでいっていないのが現状です。(詳細次ページ)

今号では、震災後生まれた多様な市民運動の中から、何件かを紹介します。そして、そのような手づくりの運動が、震災10年の節目で終結されるのではなく、震災の教訓が、さらに広く伝えられ、発展し、これからの災害に対応し得るものとして、今尚、多大な課題を抱えた学校現場とどう繋がり、教材化していくかを問題提起します。

学校が、これらの市民運動とネットワークで繋がり、市民的コミュニティの中で、子ども達の安心と安全が保障できるように、今後さらにその運動の発展を願うものです。

ますます足りない《人的条件》

求められる

復興担当教員に代わる《加配教員!!》・《少人数学級の実現!!》

この号で紹介する、震災を風化させない取り組み、市民運動

- ① 神戸で生まれた「国際的ボランティアセンター」→《被災地協働センター》
- ② 「仮設住宅住民」からスタート⇒出前語り部として、全国へ…《語り部グループ117》
- ③ 子どもの視点で、震災の教訓を世界に発信⇒《防災世界子ども会議》
- ④ 「亡くなったみんなのために何が出来るか?」→《1,17希望の灯り:「はるかのひまわり」》
- ⑤ 10周年にふさわしい「手づくり追悼式」を紹介⇒《被災者ネットワーク》
- ⑥ 「被災者、最後の一人まで」その支援を続ける研究・運動組織⇒兵庫県民復興会議
- ⑦ 地域コミュニティづくりで、子ども達に安心と安全を⇒「神戸・子どもと教育ネットワーク」設立

震災直後、学校現場から発信した教訓

どんなに準備された「防災マニュアル」も、そしてそれによる回を重ねた訓練も、その想定を超えた災害が起こった時は、ほとんど役に立たないのです。そして、どんな場合にでも、大切なことは、日ごろの教育実践の中から培われた「豊かな人間関係」であり、どんな場合にでも、子ども達が自主的で冷静な判断力を発揮できることが、「非常事態」でも適切な対応ができることでした。

そのために「施設設備の充実、一人一人の子ども達とじっくり向き合える少人数学級、適切な教職員数を配置することなど」を再確認したのです。

決して防災のためではなく、**普段から豊かな環境を用意しておくこと**が、非常時に役立つということでした。

今、学校、地域が人間不信の「防犯訓練」?

もうすぐ阪神淡路大震災から10年を迎えようとする被災地神戸の学校現場は、はたして、前項のような条件整備が進んでいるのでしょうか?

残念ながら、行財政改革の名の下、施設設備の充実どころか、校舎の耐震化計画は遅々として進まず、多くの危険な校舎が放置されたままです。

「人的条件」をみても、様々な要員（例えば新学習システムの時間講師、新採用者への指導教員など）の臨時採用者が増え、短期間で人が入れ替わる状態です。実質、正規教職員が減っており、震災前にも増して多忙なスケジュールに追われる日々です。

その中で、子ども達一人一人とじっくり向き合った指導や、その積み重ねは難しく、震災の教訓は生かされるどころか、人間不信の環境の中で毎日が「防犯訓練」さながらの現状です。行政は、震災10周年を迎えるさまざまなセレモニーを用意し、震災復興に終止符を打つ準備を進めています。トップダウンの「防災マニュアル」をこなすスケジュールに追われる日々が予想されます。

厳しい環境の中で

町並みは、以前にも増して整然としたようですが、その裏手には、まだ空き地が目立つ校区があり、ハード・ソフト両面で、その格差が一層大きくなっています。震災と経済不況の二次災害で、子ども達の家庭状況もいっそう複雑になり、就学援助児童生徒数は増え続ける一方です。年月が過ぎて町の様相は変わっても、被災者の心の復興は一樣でなく、配慮を要する家庭状況の児童生徒へのきめ細かな対応が今も求められます。

新たな役割「復興担当教員」に代わる人的配置を!

教育復興担当教員は当然のように減らされ続けています。年月が経った今、地域で生まれた様々な「震災を風化させない」貴重な取り組みを、学校教育にどう活かすか、そんな課題をも実践する、新たな「教職員の配置」が求められます。

教育復興担当教員 配置数の推移

	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度
神戸市										
小学校	63	88	80	88	92	92	84	55	18	11
中学校	14	30	45	51	47	47	44	38	28	28
計	77	118	125	139	139	139	128	93	46	39

原稿募集:「震災10年を迎えて思うこと」

原稿用紙3~4枚程度まで。
 締め集係へ *期日 11月中

①「被災地協働センター」

(代表:村井雅清氏)

(震災を風化させない取り組み・市民運動・紹介)

阪神・淡路大震災発生後の1995年1月19日に結成されたのが、阪神大震災地元NGO救援連絡会議(代表:草地賢一)でした。その分科会の一つとして、同年8月1日「仮設住宅支援連絡会」として発足しました。翌1996年4月1日、「阪神・淡路大震災『仮設』支援NGO連絡会」に改組し、分科会より独立。1998年4月1日より「被災地NGO協働センター」と改称し、現在に至っています。

その間取り組んだ多くの被災者支援事業の中で、今も続けている二つの活動について紹介します。

その一つが、「**まけないぞう事業**」です。震災で職を失った方々への支援から、当時、仮設に住んでいたおばあちゃんの「アイ」から始まり、被災地の「生き甲斐・しごとづくり」として継続しています。二つめは、災害救援活動です。国内外を問わず、災害が起こると即座に反応し、被災者のニーズに応える救援活動を展開しています。特に**海外災害援助市民センター「CODE」**(Citizens towards Overseas Disaster Emergency)を立上げ、震災で得た多様なノウハウを海外で活かすための工夫がされ、注目されます。その理念として、「支えあいや助けあいに国境はない、地球市民の一員として、海外の災害被災地に私たちが経験してきたことを伝え、また新たに学ぶことで、『被災地責任』の一端を果たす。」また、「災害を機に、メキシコやトルコ、台湾などの人たちとの交流が続いているように、ネットワークづくりが大切」とし、「国と地域で生活慣習や文化の違いがあることを認めつつ、自然災害に対する共通言語を見いだして、共に支え合っていく。それが『地球市民力』の向上につながることを確信する。」とその趣旨に謳っています。この中に震災の教訓がしっかり生かされていることを思い、今後の活動に期待するものです。その中でも、紛争の被災地支援として「アフガニスタン救援プロジェクト」として、2002年7月~荒地に「カレズ=地下水」を掘る、「ブドウ畑」をつくる、などの支援事業が続いています。紛争地での被災者が、自立できるようなプロジェクトを次々立上げ、神戸市民力を世界に発信していることにも学ぶものが多くあり、その活動を支えあっていきたいものです。



NGO活動の原点に学ぶために

「ボランティア元年」といわれた阪神淡路大震災、その1年後に、早くもボランティアの活動やその存在が危ぶまれた時、その「あり方」について、故・草地賢一氏(当時、阪神大震災地元NGO救援連絡会議代表、後に被災地協働センター代表)が大変注目の論文を発表されました。その内容の一部を下記に紹介します。

震災後10年を迎えようとしている今、また、様々なボランティア、NPO、NGOなど、支援活動の存続の危機がいわれている時に、「ボランティア」、その精神をもう一度振り返り、発展させることが求められます。

今、もう一度「ボランティア」NGO活動の原点を考える
 (故・草地賢一氏の論文より考察)

震災後、いち早く上記のようなNGOを立ち上げた故・草地賢一氏は、被災地に駆けつけた百二十万を超えるボランティアの行動を、今までの制度中心の民主主義から「自主的自律的な優しい人々の出会い」と高く評価しました。

そこで強調しているのは、被災者、特に自力で復旧が困難な人々の切実な願い、医療・福祉への資金助成を含む「公的支援」の必要性をいっています。そして、それを求める運動を進める者の条件として、「豊かな人間感覚を持ち、不正を怒り、それを正す行動力」を訴えています。そして、ボランティアの理念や、本質論についての論議が必要であるとし、ともすれば、「行政の下請け補充」として、その「制度や仕組みの捉えなおし」をし、最終、再び、すべてを行政に委ねてしまう、という結果になることに懸念を表明しました。

(震災後十年経とうとしている現代の課題でもあります。)

そして、震災1年後の十二月、神戸で行われた「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」で採択された「三つの提言を含む神戸宣言」を次のように紹介しています。

1. まち復興の主体は被災者自身であり、その過程は被災者が決める。
2. 住居再建は暮らしを立て直す基本。国はその資金保障をする。
3. 医療・福祉の確保とくらし再建のため、行政は、条件を整備する。

そして、ボランティアは、政府、行政に対し、対等に提言、異議申し立てをし、対案を提示。「公共」をつくるべく責任、役割能力を持つべきであり、神戸から日本が変わるといふときめきを実現するため、ボランティアを方法論、技術論に押し込められない。としています。

資料(朝日新聞九八年一月二六日論壇「官高民低」の社会の中で)より

このことが、まさに今、行政が用意している「市民協働参加条例」に対し、市民、とりわけ震災後の自主的な運動体が、どのように、市民活動に参加していくか、行政から一定の距離をおいて、常に「対案」を出せる関係にすることが、求められます。

連絡先 被災地NGO協働センター: ngo@pure.ne.jp 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10 〒652-0801 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702

連絡先: CODE 海外災害援助市民センター事務局 〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10 (被災地NGO協働センター内)

TEL:078-578-7744 FAX:078-576-3693 e-mail: info@code-jp.org

② 「阪神・淡路大震災 語り部グループ117」

(代表:長谷川 忠一氏)

(震災を風化させない取り組み・市民運動・紹介)

毎日新聞大阪社会事業団と毎日新聞社、阪神大震災ボランティア・サポート制度助成を受けて活動

語り継ぎたい「命のバトンリレー」

1999年5月、仮設住宅で暮らしていた10人の男女で結成されました。

辛い、悲しい、忘れない体験を、あえて「語り継ぐ」活動を続けています。その意義を、発行している季刊ニュースから、紹介します。

「語る意義」⇒「阪神・淡路大震災の当時の様子を、体験者として語り継ぐことは、震災犠牲者の「尊い命」「大切な命」の伝承や経験だけでなく、これからの生活に《幾多の災害》に対しての警鐘となるだろう。そのことを「語り部」としての意義として感じていきたい。」



- 主な活動⇒① 被災地神戸に来た修学旅行生に語る活動。
② 各紙、マスコミなどの取材を通して広報活動
③ 他府県の防災事業などでの「出前語り部」活動

連絡先: 阪神・淡路大震災被災者 語り部グループ117 事務局

住所: 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通3-1-17-807 TEL/FAX 078-242-8805

代表連絡: 090-3949-2483(長谷川・携帯): 事務局連絡: 090-3288-4631(奥村・携帯)

③ iEARN プロジェクト「防災世界子ども会議」1.17命の尊さを考えよう!

主催: JEARN 防災世界子ども会議2005実行委員会 (震災を風化させない取り組み・紹介)

防災の日 9月1日スタート! まとめとして、2005年3月、兵庫県で子どもたちによる国際会議を開催!

「子ども達が震災の教訓を世界へ発信」の場を準備中です。

以下その主旨と内容、経過をお知らせします。多くの子ども達の参加を呼びかけます。

プロジェクトのねらい

2005年に阪神・淡路大震災10周年を迎えるにあたり、大震災で経験した多くの貴重な経験や教訓を活かし、日本の子どもたちが、震災から復興する世界の国々の子どもたちと共に、インターネットをつかって、今後の大震災に対する被害の軽減や復興に活かせる話し合いをもつプロジェクト。国際的な視野の防災意識を持った子どもを育成することを最大の目的とする。

プロジェクトのすすめかた

世界とコミュニケーション!

電子メールで自己紹介から始まり、各段階の活動は、インターネットを活用し、テレビ会議や電子フォーラムでディスカッションや活動報告が行われます。またホームページで進行状況を掲載していきます。

プロジェクトのまとめをWEBで世界へ発信!

イベント

国連防災世界会議関連事業 「震災10周年メモリアル」 (仮称)

日時: 2005年1月18日(火) (予定)

記念植樹、絵画展「絵で語る震災、イランとのテレビ会議他

会場: 兵庫県淡路夢舞台国際会議場他

阪神・淡路大震災10周年記念事業に参加



「防災世界子ども会議 2005in ひょうご」

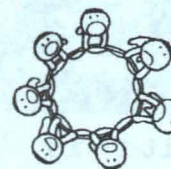
日時: 2005年3月27~28日 (予定)

会場: 兵庫県淡路夢舞台国際会議場他

主催: JEARN 防災世界子ども会議2005実行委員会

共催: 兵庫県、JICA 兵庫他(予定)

後援: 兵庫県教育委員会他(予定)



iEARN(アイアーン)とは 「世界の子どもたちが交流し、相互理解を深めるための世界最大のネットワーク」です。インターネットを利用して、新しい遊びや環境問題、社会問題などをテーマにした交流プロジェクトが158も展開され、約100カ国以上、約70万人の子どもたちが参加しています。」

iEARNの日本の窓口が、JEARN(ジェイアーン)です。iEARN URL: <http://www.iearn.org/>

詳しくは、⇒お問い合わせ先: JEARN 防災世界子ども会議2005実行委員会事務局

TEL&FAX: 078-251-6833 E-mail: 20050117@jeearn.jp

URL: <http://www.jearn.jp/japan/earthquakeYS2005/index.html>

④ 「HANDS・阪神淡路大震災 1.17希望の灯り」

(代表:堀内まさみ)

(震災を風化させない取り組み・紹介)

「希望の灯り」の名前の由来

神戸・三宮の東遊園地に2000年1月17日に建立された「1.17希望の灯り」の碑文には、阪神淡路大震災で奪われたすべての命と、生かされた私たちの思いが凝縮されています。

マグニチュード7.2を記録したあの大地震の時、私たちは、かけがえのない『いのち』を失うと同時に、国籍や宗教、肩書きなどの違いを超えて家族や隣人、地域で互いに心を結び、助け合いました。電気もガスも水道もない中手をたずさえ、支えあったあの『こころ』は、まさに暗闇を照らす小さなともしびだったのです。

活動の様子

あの日あの時の『こころ』を継ぐように、被災地の公園や街角、学校などには数多くの「慰霊碑」「追悼碑」「モニュメント」がつくれ、「震災モニュメント」と名付け、その所在地を記した地図「震災モニュメントマップ」を1999年から発行・改訂してきました。「震災モニュメント交流ウォーク」という新しい活動も生まれました。この活動に携わってきたご遺族やボランティアの働きかけによって「1.17希望の灯り」は建立されました。そこに燈されている灯りは、被災10市10町のモニュメントなどを巡って運んだ種火、そして県外被災者・ボランティアによって47都道府県から寄せられた種火の一つにして点灯されたものです。

そこでの出会いから、全国都市間ネットワークづくりも芽生えてきました。また東遊園地で開催されている「1.17追悼行事」は、ご遺族・ボランティアを中核に行政がサポートする形態へと移行してきました。「亡くなった『みんな』のために、いったい何ができるのか」という思いに突き動かされ、活動を続けてきました。(ホームページの紹介文の中から抜粋)

「はるかのひまわり」を咲かせる運動も、亡くなった命を忘れない取り組みの1つです。

連絡先: 阪神淡路大震災「1.17希望の灯り」

〒651-1131 神戸市北区北五葉1-13-1 TEL/FAX: 078-595-2800 FAX: 078-595-2801

NHK 震災特集「はるかひまわり」を視聴して

家族のあり方、「心の支え」が何か?などを問いかけたドキュメンタリー



テレビ、新聞など、各種マスコミは、この10周年を機に、震災特集を組み、報道しています。9月1日放送されたNHK震災特集Bshiビジョン番組「はるかひまわり」もその一つです。

そこで登場する加藤いつかさんは私の教え子に当たり、少し取材を受けました。そして私自身も、当時の教え子にメッセージを送る機会を得ました。後に、9月24日「NHK にんげんドキュメント」として、再編集された形で放映されました。(放映時間が短縮され、家族だけに焦点が絞られたので、私の部分はカットされましたが)「震災で家族を亡くし、残された家族のこの10年間の心の軌跡を辿る」という、大変重いテーマに取り組まれた番組制作スタッフのみなさんに敬意を表します。

加藤さん家族を始め、家族を亡くされた多くの方々の無念さと、生き残った者が「希望」を託したい花「ひまわり」の存在を思いました。ここにその内容を紹介します。私自身の感想を述べ、最後に若干のご案内をさせていただきます。(神戸市立稗田小学校「当時・本山第二小学校」)池見宏子

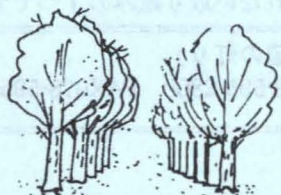
番組では、当時小学6年生の「はるかさんの死」を現実のものと受け止められない家族の計り知れない悲しみ、それを乗り越えるきっかけとなった様々な人々との出会い、近所の人が続けていた「はるかひまわり」の運動を通して、新しい生き方を見つけていく感動的なドキュメンタリーです。

家族を失った計り知れない悲しみ

いつまでも亡くなった子どもを思い、嘆く親。一番多感な中高時代に、自分の本心(震災で受けた心の傷)を隠して、明るくふるまい、家族を支えようとした姉のいつかさんに起こった異変。普段当たり前の家族の会話、空気のような温もりが、いかに大切なものか、逆に見る人に訴えかけ、「家族」のあり方を問い直してくれています。

違和感がある「復興」 新しい家族の形、それは「再生」

家族を亡くした多くの被災者がそうであるように、この家族も、「はるかさんの死」は、二度と蘇らない家族の形であり、そんな家族には「復興」は有り得ない厳しい現実であること、「はるかさんの死」を受け止め、新しい家族としての形「再生」として歩み始めるには、何年もの時間が必要であったことが、浮き彫りになっています。



「心の闇」を乗り越えるために

姉のいつかさんの心の苦しみは、今の多くの子ども達に共通するテーマでもあると思います。今の子ども達は、何を考えているかわからない。「心の闇」を持っていると、よく言われます。しかし、それは、今に始まったものではなく、これまでも、思春期は、そんな「心の闇」を、誰もが体験する年頃でもあるのです。それぞれが、様々な形で意識する、しないに関らず、そんな自分を乗り越えて、人の苦しみを理解できる、責任ある大人になっていくのです。その心の変化、乗り越える過程が、多感な中高時代に「震災・妹の死」という極限状態に置かれたいつかさんを通して描かれています。

この中で、いつかさんの大きな心の転機として、画家ニキータさんからの「絵」の贈呈式に参加できたこと、遺族の人たちとの出会いが紹介されていました。

しかし、「そんな場に出ることができるようになった心境の変化は何か?」は残念ながら紹介されていません。

しかし、その過程こそ、誰もが保障されるべき大切な営みであったことを、教訓として、記したいと思います。

「二つの条件」を付け加えたい。

実は、加藤いつかさんは、この「被災地だより」でも、たびたびその心の変化を手記にして寄せてくれていました。その中にこそ、彼女自身が自分の居場所を見つけていく過程を記しているのです。それには、二つの条件が記されています、その1つは、いつかさん自身が、自分の心の軌跡、思いを綴りながら、自分の心を整理していったこと。そして、2つめは、彼女自身が、自分の苦しい体験を初めて人に語ることで、共感を呼び、人に役立つこと、自分自身の生きる意味を見つけていったことです。様々な場所で、自分を語る努力を重ねてきました。

このような2つの営みがあってこそ、初めて妹「はるかさんの死」を受け止める様々な行事にも参加でき、家族への気遣いを無理なくできるようになったのではないのでしょうか?

このことは、人々は、叫び、喚き、孤独の淵をさまよう…どうしようもない辛い体験をした時、それを乗り越える手段として、その体験を様々な表現で訴えることをします。言い知れぬ思いを表現したい…それは、絵や文であったり、音楽、演劇、などの芸術であったり、多様な表現方法を通して、時間をかけて見つめ直す営みが必要なのです。そして、それらを受け止める第三者、共感できる人たちとの出会いの中でこそ、心が癒され、辛い心境も乗り越えられるパワーになることを、確認したいのです。

今の学校に、地域に、そして家庭に、そのような空間が、人々のつながりがあるでしょうか?いつかさんの場合、手記を書き、語ることで自分を見つめ直し、そんな彼女を温かく受け止める場が、結果的には「はるかひまわり」を守り育ててくれていた地域にあり、そこに、自分の居場所を見つけることができたのだと思います。

「生」の象徴「ひまわり」の花

そして、「ひまわり」の花は、家族にとっての「はるかひまわり」から、命を奪われた多くの人たちの「生きたかった」願いと重なり、これから生きようとする者にも、共感の輪が広がる象徴的な「希望」の花になったと思います。そんな一つとして、震災当時の教え子を忘れないための「花」として、私のメッセージが紹介されたのではないかと思います。

いつかさん家族が、「肩の力を抜いて、それぞれが、自分に無理なく自然に生きる」姿を見せてくれることを心から願い、そんな家族の一員としてのいつかさんに、これからもエールを送りたい気持ちです。



あなたのイメージする 「ひまわりの絵」を、募集中!!

「ひまわり」の季節は過ぎましたが、その心は、いつまでも大切にしたい…そんな思いを込めて、来年1月17日追悼式の会場に「ひまわりの絵」を咲かせるそうです。その絵を下記のとおり募集しているので、ご案内いたします。サイズ・画材自由です。イメージでも、具体物の描写でもOKです。(但し、作品の返却はできません。ご了承ください。)
送り先:「希望の灯り(p5)内・加藤いつか宛」

NHK 朝の連続テレビ小説「わかば」《街と家族の再生がテーマ》に期待!!

震災で傷ついた家族のこころの再生を成し遂げるまでを描いています。今尚、家族を失った悲しみを背負っている人や、被災地に戻れない多くの人たちに希望を届ける番組になってほしい…そんな期待を込めて紹介します。

